

大瓶猩々

前

ワキ かうふう

シテ 童子

後

ワキ 前に同じ

シテ 猩々

ツレ（六人） 伴ふ猩々

地は 唐土

季は 九月

ワキ詞

「是は唐かねきん山の麓に。かうふうと申す民にて候。我親に孝有るにより。次第々々に富貴の家と罷り成りて候。又此間何処とも知らず童子数多来り。某が酒を買ひ取り候。今日も来りて候はゞ。如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。

シテ一声

「わたづみの。そことも知らぬ波間より。頭はれ出づる日影かな。

ワキ詞

「今日の市人は何とて遅く来り給ふぞ。

シテ詞

「嬉しやさらばと内に入り。いつもの酒を愛しけり。

地

「琴詩酒と。聞くも隔てぬ友人の。く。いつもかはらぬ酒功賛に。酒を愛せし来し方の。人の心にひきかへて。是は琴にも盃。詩を作るにも盃。唯酒飲の友ばかり。恥かしやさこそげに。市人の我を笑ふらん。

ワキ詞

「此程は何処の人とも弁へず。今日は御名を名乗りおはしませ。

シテ詞

「今は何をか包むべき。是は潯陽の江に年久しき。猩々と云へる者なるが。御身親に孝有るにより。天のあはれみ深ければ。泉の壺を与へんなり。疑ひ給ふなかうふうと。

地

「夕べの空も近ければ。く。暇申してさらばとて。行くかと思ればさにぬりの。面も赤く様かはりて。市人に立ちまぎれて。跡も見えずなりにけり。跡をも見せずなりにけり。(中人)

地

「御酒と聞く。く。名もすさましく秋の来て。暖め酒と菊月の。頃もはや紅葉の。はや色付くか一重山。薄き紅葉ば色々の。菊の盃すゑ置き。秋の夜深く待ちけるに。

ツレ

「不思議や此友の。

地

「不思議や此友の。来らぬは覚束な。沖に向ひて我友の。など遅なはり給ふぞや。急ぎ給へ友人。

地

「又猩々は頭はれ出で。く。彼かうふうに。妙

なる泉を与へんとて。波間を分けて潯陽の江の。
汀も近く顕はれたり。

地

「頃は秋の夜月おもしろく。く。汀の波も更け静
まりて。数多の猩々大瓶に上り。泉の口を取ると
ぞ見えしが。涌き上り涌き流れ。汲めどもく尽
させぬ泉。何れも戯ふれ。舞ふとかや。 (中の舞)

シテ

「菊の露。積りて尽きぬ此泉。

地

「尽きせぬ宿に。

シテ

「返し授け置き。

地

「是までなりや。酔ひ伏す夢の。覚むると思へば又
起き上り。命長柄の柄杓の酒を。道俗男女に残さ
ず進め。元の泉に収まりければ。何れもく。足
もとはよろくよろくと。繰言茂く。千秋万歳
君千代までと。く。栄ふる御代こそめでたけれ。